

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

東北学院資料室

LIFE

Vol.2

2002.12.31

LIGHT

LOVE



礼拝用の鐘

1955(昭和30)年創立70周年を祝って、在米同窓生が寄贈。本館屋上に設置され、5年間程全学に午前10時の礼拝を告げた。



学校法人 東北学院



土樋本館

1926(大正15)年、シュネーター夫妻の帰米中の募金によって、すでを取得していた南六軒丁の敷地に専門部校舎として建てられた。横浜のモルガンの設計で、市内仁田工務店が建築を請け負った。構造は鉄筋コンクリート三層建、完全な耐震建築で、総延坪数603坪、建坪は155坪である。



C O N T E N T S

ごあいさつ	東北学院長 田口 誠一	2
多賀城寄宿舍の思い出	伊藤 浩吉	4
東二番丁物語	大場 時也	6
小松武治先生と『沙翁物語集』	久保 忠夫	12
第3回ホームカミングデー『同窓祭』		18
—懐かしい出会いがそこにある—		
アーサイナス大学夏期留学の歴史		20
第25回対青山学院大学二部交流定期戦		22
各キャンパス大学祭		24
『島崎藤村と東北学院』特別展		26
工学部創設40周年		30
2002(平成14)年度時事		31
東北学院資料室運営委員会規程		32
資料室日誌・利用状況		33



「東北学院資料室」第2号 発行にあたって

東北学院長 田口 誠 一

「東北学院資料室」は、仙台神学校創設の時代から今日に至るまでの東北学院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「創立の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に資することを目的として、2001(平成13)年5月15日(本学院創立記念日)に開設されました。爾来、同窓生をはじめ内外多数の方々の見学をいただき、感謝申し上げます。

本資料室は本院の三校祖である、押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーを中心とした常設展示(約200点)がその根幹となっておりますが、本年度は

米国アーサイナス大学夏期留学第30回記念展示『アーサイナス大学と東北学院』(平成14年5月15日～10月4日)、島崎藤村没後60年記念展示『東北学院の歴史&島崎藤村』(平成14年10月15日～平成15年5月2日まで)などの企画展も催しました。

本学院とアーサイナス大学とは、1973(昭和48)年から2002(平成14)年まで約30年間にわたり交流を深めてまいりました。今年、ジョン・ストラスバーガー学長夫妻を招聘して本学院創立116周年記念式典を催しました。島崎藤村没後60年記念・統一企画事業参加の特別企



《各キャンパス 大学クリスマス礼拝》



多賀城キャンパス



泉キャンパス



土樋キャンパス

画においては、本学院が所蔵する藤村にかかわる資料などの展示の他、『ガラ藤村』による舞台公演のビデオ上映、本学名誉教授久保忠夫氏による「島崎藤村と東北学院」と題する記念講演、同窓生のさとう宗幸氏による「片恋」コンサートなどが実施されました。また、これを機に発行されました図版目録『島崎藤村と東北学院』（教養学部教授渥美孝子氏編）は、東北学院の果たしてきた歴史的役割について理解を深める上で、貴重な資料として位置づけられることと思えます。

さらには、本資料室を通し今まであ

まり知られていない東北学院の先達たちについても知ることのできたことは幸いであり、諸先達の熱い祈りとその献身的な業により今日の東北学院があることを、これからも機会を得てご紹介申し上げたいと存じます。

そして、私たちの先人の幻を己が幻とし、その信仰的遺産と学問的良心を忠実に継承し、今後とも皆様の変わらぬ温かいご援助を得て本資料室のさらなる充実発展を図ってまいりたいものです。ありがとうございました。

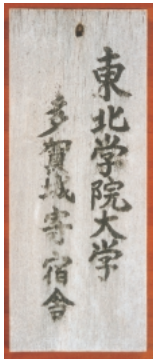


地図は島崎藤村が在仙していた時期に近い年代の仙台市街図

プロフィール TAGUCHI, Sei-ichi

1920（大正9）年生まれ
東北学院中学部卒業・旧制第二高等学校・
東北大学工学部卒業後
東北学院中学・高等学校校長、常任理事
学院長、理事長、同窓会会長

多賀城寄宿舎の思い出



思い出ふかい
門札

多賀城寄宿舎は1954(昭和29)年11月15日竣工。
1996(平成8)年度から舎生の募集を停止して、同年
5月に解体。



元多賀城寄宿舎副舎監
伊藤 浩吉

私が多賀城寄宿舎副舎監の委嘱状をいただいたのは1972(昭和47)年8月1日でした。当時の学生部長は故黒須徹先生で、舎監は川嶋順先生、そして賄人は松崎とらよさん、千葉きよしさんのお二人でした。この時代は学生運動の煽りがまだ残っていましたし、在舎期間も2カ年で、大学の1・2年生が半々で入舎していました。当時の学事暦は7月上旬から9月上旬まで夏休みで、9月中旬から前期試験が行われていました。寄宿舎敷地内には舎監宅がありました。事情により、空室になっていました。私は、舎生が帰郷している間、8月上旬から舎監宅に移り住みました。9月上旬に舎生が戻って来たときには、突然、舎監宅に電気が灯り私たち夫婦が出入りしているのを横目で見ながら、物珍しそうに見られ、始めはあいさつしても不思議な顔をして、あまり返事がなく戸惑いを隠せませんでした。

9月最初の礼拝で、舎監の川嶋先生より私たち夫婦を紹介していただき、「この8月より副舎監の伊藤さんと二人で多賀城寄宿舎の運営にあたります。いろいろな相談はまず始めに副舎監に申し出て下さい。副舎監とは毎日学校でお会いして常にお話をしていますので、皆様の相談ごととは即伺っております。安心してご相談下さい」と話されました。前期試験が9月中旬に開始されたので大変静かな着任後の1ヵ月を過ごしました。寄宿舎には舎生が組織している委員会があり、当時の舎内運営は全て委員会が握って

いました。10月に入ると一日おきくらいに、それも午後10時半頃になると「先生、お話しがありますので食堂までいらして下さい」と必ず委員会の渉外担当の舎生より呼び出しがありました。私は着替えて食堂に参りますと、一番端に丸い椅子が置いてあり、食堂のテーブルの窓側には2年生が座り、内側には1年生が座っていました。総勢44名の舎生全員から一斉に見つめられる光景は異様であるとしかたえません。そこで委員長は一枚の紙切れを出して質問書を読み上げました。今でもはっきりと覚えています。「どうして副舎監に任命されたのか」「われわれがつくった寄宿舎規則を認めよ」この2つの質問で一回の話し合いは約2～3時間かかりました。副舎監の私が体力を消耗したところで、彼らの条件を認めさせるという先方のやり方だったので、最後は物別れで終わっていました。当時は私も若く、血気盛んでいたあの頃は、ますます目が冴えて話し合いができましたが、その傍らでは1年生は眠い眼を耐えていたように思われます。10月だけで16回も話し合いが行われ、そのうちに、徐々に委員会の主張の矛盾点わかり、それに伴って少しずつ参加する舎生が少なくなってきました。紆余曲折を経て、11月上旬より大学側

側の寄宿舎規則で運営できるよう



正面入口より見た多賀城寄宿舎



裏側より見た多賀城寄宿舎



舎生の部屋(1900年当時)



1976 (昭和51)年クリスマス
賄人の松崎とらよさん(左)と千葉きよしさん(右)



1976 (昭和51)年クリスマス・元舎監の川嶋順先生(右)



1979 (昭和54)年クリスマス
元舎監の柴田誠先生(左)と倉松功学長(当時は学生部長・右)



1979 (昭和54)年クリスマス
賄人の千葉きよしさん(左)と渡辺マスエさん(右)



1983 (昭和58)年クリスマス
毎年クリスマス礼拝で奏楽をしてくださった宮城学院の故菊地明子先生

になりました(激論を交わしたその時の委員会メンバー数名とは未だに年賀状を取り交わしたりしております)。

寄宿舎の歴史も1年後には大きな変革の時をむかえ、1974(昭和49)年4月には舎監の交代があり、新しく当時キリスト教学科の佐々木勝彦先生をお迎えしました。その年の4月から学生の在舎期間が1カ年になりました。この理由は入舎希望者が多く、その対策としてこれまでより二倍の希望者を一挙に入舎させるためでした。しかし、舎監・副舎監と特に賄人さんの仕事の量が増えて4月と5月の2ヵ月間は大変でした。それでも舎生との仲が緊密だったので、舎監と副舎監が1年生の中からメンバーを選び委員会をつくり、三者で寄宿舎の日常運営を営むことができるようになりました。そして、在舎期間中の寄宿舎生活に変化を持たせるために二つの大きな行事を計画しました。その第一は、夏休み終了後、委員会が企画する9月のコンパと12月に舎監と副舎監が企画するクリスマス行事でした。クリスマス礼拝については、特に宮城学院の故菊地明子先生の奏楽と千田ふみ先生の教え子の女子大生有志の皆さん、それに本学職員有志の皆さんによる「メサイヤ」の合唱を22年間ご奉仕していただきました。また22年の長い間、クリスマス



1986 (昭和61)年クリスマス
賄人の渡辺マスエさん(左)と荒木安子さん(右)



1988 (昭和63)年クリスマス
故菊地明子先生の奏楽でクリスマスを祝う



1990 (平成2)年クリスマス
元舎監の佐々木勝彦先生(後列左)と故清水道生氏(前列左)

故清水道生先輩方のご奉仕のたまものでした。

昭和54年の3月末で松崎さんが定年退職され、同年4月には新しく賄人として渡辺マスエさんを迎えることができました。特に多賀城寄宿舎は貴いアメリカ人の献金で建てられた寄宿舎でした。これを大切に使用するよう常に指導して来ましたし、舎生もわれわれの意をくんでいただいたことにも感謝しております。私が24年間、無事に多賀城寄宿舎で副舎監として奉仕ができましたのも、学生部長の故黒須徹先生、倉松功先生、沼田俊則先生、それに舎監の川嶋順先生、佐々木勝彦先生、柴田誠先生、賄人の松崎とらよさん、千葉きよしさん、渡辺マスエさん、荒木安子さん、渡邊きみ子さん、高橋ミヨ子さんら多くの皆様方のご協力のおかげで、副舎監の仕事ができましたことに重ねて感謝申し上げ、「多賀城寄宿舎の思い出」とさせていただきます。



1991 (平成3)年クリスマス
賄人の渡邊きみ子さん(左)と渡辺マスエさん(右)



1991 (平成3)年クリスマス
工学部事務長故清水道生氏(左)



1993 (平成5)年クリスマス
賄人の渡邊きみ子さん(左)と高橋ミヨ子さん(右)

プロフィール ITO, Kokichi

1939 (昭和14)年生まれ
東北学院大学文経学部経済学科卒業
東北学院大学勤務
二部事務長、泉キャンパス事務長・管財部長

東二番丁物語



元東北学院大学講師
大場 時也

I. “学都”、“番ぶら”の揺籃の地

(1) 東一番丁

仙台市が“学都”と呼ばれたのは大正時代、仙台出身の国文学者小倉博先生が、著書の中でよく使われたのが初めと知りました。1887(明治20)年に設置された第二高等中学校(後の旧制二高、東北大)の影響が大きかったといわれます。

当時の学生は、学生帽に詰め襟の制服姿で、東一番丁を闊歩したり、古本屋に喫茶店にぶらぶら出掛ける。その姿を“番ぶら”と言いました。当時一番丁周辺は、“番ぶら”する学生であふれていたという記憶があります。今では、“学都”も“番ぶら”も死語となってしまいました。

現在仙台には、計16の大学と短大がひしめき、専門学校などを合わせると8万人近い学生が暮らしています。仙台市の発表によると、市民1万人の意識調査の結果では、仙台のイメージに「学都」を挙げたのは10.6%だけです。「杜の都」56.5%、「東北の中核都市」が52.0%となっています。20~30代の若い世代ではわずか5%といえますから、「死語」を宣告されるのもやむを得ません。

大学が街から郊外へと離れ、“街の代名詞”が消え、そのうえ学生が持つエネルギーも存在感も薄れていくのは惜しい限りです。私には“番ぶら”などする暇も金もない、だいいち一番丁の一人歩きすら不許可な時代で、青春を謳歌するには早すぎる東北学院中学部の生徒でした。

私は、1939(昭和14)年4月東北学院中学部に入学しました。入学早々、外国人の先生がいることや、始業前の礼拝、時たま南六軒丁の礼拝堂では日本には3台しかないというパイプオルガンの演奏に身震いしたり、カルチャーショックの洗礼でした。教室では、山浦拓造先生の英語に、「どうして日本人がスラスラとこうも英語が喋れるのか」と耳を疑い、校庭をサーベル姿で闊歩している軍人教官の姿に威圧されるなど、全く別次元の中学一年生の日課に吸い込まれていきました。

入学当初から軍国主義教育は始まっていました。服装は、カーキ色の制服制帽、ランドセルを背に、ゲートル巻き、これが当時の中学生の典型でした。旧仙台一中(現仙台一高)生が、ゲートルを巻かず肩かけ鞆で登下校する姿には違和感がありました。

(2) 東二番丁と柳町

作家の色川大吉は、「戦時下の仙台、私の青春」(仙台市史しおり)に東北学院中学部の校舎を次のように書いています。「仙台には旧制二高の生徒で、日米戦争直前の1941年4月から1943年3月の終わりまでいました。明治以来の伝統を誇るキリスト教系の名門学校が多く、薦でおおわれた煉瓦造りの校舎は私たちの憧れのマトでした。島崎藤村が『若菜集』を書いたのもその教師として赴任していたときだったし、どこかエキゾチックな感じがして、明治のロマンがただよっていた」。島崎藤村夫妻は、1937(昭和12)年6月学院に來校しています。

東一番丁とは違う東二番丁のエキゾチックな東北学院と宮城女学校の静寂なたたずまいをほうふつとさせます。両校を囲む東二番丁と柳町通りには、藩政時代からの閑静な町並がまだ残っていました。仙台開府の際に割り出された「東番丁」は当時、「国分町」を基点に1から5までだったそうですが、いまJR仙石線榴ヶ岡駅の近くには「東十番丁」がまだ残っています。

東二番丁は、中級武士の町で、狭い通りは屋敷林で昼間でも薄暗く寂しい町並だったそうです。高層ビルが林立し、道幅が50メートル、延長南北2キロに貫く大動脈の現在を誰が想像できたでしょう。

柳町も藩政時代には御譜代町の一つとして、城下鎮護のために多くのお堂が建てられ、本尊として現存の大日如来が建立されたといわれます。また、柳町は職人の町として今も古い伝統を受け継いでいます。昭和20年7月9日夜から翌朝2時半まで、仙台は米軍機B-29の爆撃を受けました。その数80機とも100機ともいわれ、



仙台を爆撃する米空機 B-29。翼下には柳町が……

油脂焼夷弾の投下によって大被害を被りました。町の人びとは、近くの片平丁小学校の校庭に避難しようにも、爆撃は川内第二師団司令部から下手へと広がり、火の手は評定河原から片平丁にむかい、小学校は避難所とはならず、南へ南へと逃れるほかなかったようです。

近くにある東北学院はどうだったのか。校舎は「出征部隊編成隊」という重要な任務に充てられ、校庭には、その兵隊たちの避難所として多くのタコツボが掘られてありました。柳町の人々は運よくこのタコツボに身を潜めて、朝になって一人またひとりとモグラみたいに顔を出して見渡すと、柳町は全部焼け落ちていて、仙台市役所の建物だけが向うに見えたそうです。この空襲で仙台市の中心部の焼失は11,641戸、住民被災57,321、うち死者911人といわれます。柳町の瀬川さんというかたが、被災50年目の節目に、仙台空襲で亡くなった人々を記録する銘板を造ったそうですが、一



終戦直後の柳町周辺の地図

番最初に「あべなつこ11歳」と出てくるのだそうです。当時瀬川さんは13歳だったそうです（仙台市史柳町史から）。

1928(昭和3)年3月、中学部敷地の北東の一隅、東二番丁と柳町通り角に社交館ができました。同窓会館、



社交館

学生会館、寄宿舎の機能をもって、西洋式テーブルマナーも指導されるとの先輩からの言い伝え、これは夢と消えていました。仙台空襲で焼失するまで、東北学院教会のさまざまな活動に、特にミセス・シュネーダーにとっては、1941年6月24日逝去されるまでの活動のホームグラウンド的存在だったと言われています。私の級友菅井達夫君が、叔父さんと国語漢文を教え、寄宿舎舎監だった石川先生を構内の居宅を訪問したある日、居間の真ん中の座布団に座った大柄で上品な西洋婦人がおられ、そのかたがミセス・シュネーダーであると母に教えられたという、彼の小学生時代の思い出があるそうです。

(3) 赤煉瓦校舎と不釣り合いの奉安殿

東北学院「普通科」は、1916(大正5)年に「中学部」に、そして1943(昭和18)年には「中学校」へと改称されました。下の写真がカラーでないのが残念ですが、



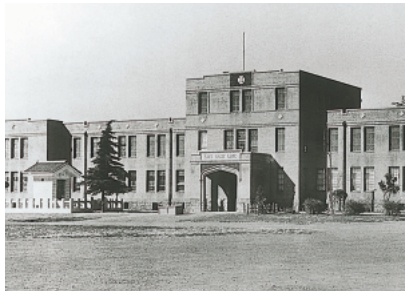
普通科校舎 1919(大正8)年3月2日焼失

その普通科校舎の地番は東二番丁40番地。ちなみに宮城女学校は、1886年同じ東二番丁51番地の民家を借出して授業開始、この同じ年に仙台神学校が設立しました。学院は、現在は青葉区一番町一丁目9-1と変更になりました。

「東北学院100年史」(以下、100年史)によると、1905(明治38)年9月完成。宮城女学校校舎と同じく、ドイツ系建築家の手腕によるものでしたが、1919(大正8)年3月2日、南町47番地の一家の失火で仙台の街が大火、



中心部700戸全焼により校舎と寄宿舎焼失の憂き目にありました。「この校舎は極めて典雅な外観と内部の装飾



左端は1941年に落成した「奉安殿」

をもった、ルネッサンス式の建築で、外壁は赤レンガと窓の周辺の白の御影石、尖った屋根は赤、白、黒がよく映り気高い明朗さを示していた」と「東北学院70年史」に書かれてあります。

私たちが学んだ校舎は「100年史」によると、入学の17年前、1922(大正11)年に新築落成しました。その年の2学期(9月9日)から移転授業開始され、当時の中学部長は五十嵐正先生でした。新校舎は専ら防耐火性重視から、平らな屋根



校舎正面

(三階は音楽室)、頑固な外壁、以前の校舎のような明るさや、シックで洒落た天を指す伸びやかなイメージは失われてしまいました。しかし新校舎の南面した正面入口の真上は、LIFE LIGHT LOVEの三文字が鮮やかに刻み込まれ、以後東北学院の3L精神として長く、広く、深く親しまれるようになるという偉大な歴史と伝統の端緒を刻むことになったのです。しかしこの3Lはやがて、私たちの目の前でコンクリートで塗りつぶされるといことになるのです。

下の写真にもあるサイカチの木は、同窓生たちの思



1922(大正11)年 新校舎落成

い出のシンボルでした。樹齢およそ250年と推定される巨木でしたが、1959(昭和34)年9月27日「伊勢湾台風」の直撃を受けて、玄関に向かって根元から倒れ伏しました。このサイカチの木と相対するような位置に、石柵に囲まれて若木の支柱もあらわに、赤煉瓦の玄関と全く不釣り合いな石造りが奉安殿です。1941(昭和16)年11月3日落成しました。私たちが三年生の時でした。奉安殿とは天皇・皇后の御写真や「教育勅語」、1939(昭和14)年5月22日下賜の『青少年学徒ニ賜ハリタル勅語』などの勅語や詔書を安置しておく石室です。登下校には最敬礼することが義務づけられたのは言うまでもありません。

II.軍国主義教育の浸透と配属将校の特別室

(1)東二番丁に一陣の風

少年が何の自覚もないうちに、自然に自分の道を選んで歩き出すというのは幸か不幸かなどの分別もなく、五里霧中の道を歩き出していたわけです。1941(昭和16)年11月3日奉安殿が落成した1ヶ月後の12月8日、日本は米・英に宣戦布告したのです。

この日、私たち三年生は全員で、映画「川中島の戦」を観にいきました。南町通り(昭和8年1月、満州事変の第二師団長の多門二郎を記念して通称多門通りとよばれ、市電が通っていた)と東三番丁の交差点にある「東宝キネマ」でした(この当時仙台には、文化横丁の「文化キネマ」、日の出横丁に「日乃出映画劇場」他に「仙台日活館」などがあり、映画はすべて父母同伴が条件だった)。いよいよクライマックスの決戦という時、スクリーンが突如暗転中断され、命令で急遽学校へ帰り、霜柱たつ校庭で直立不動で「宣戦の大詔」のラジオを聴いたのです。

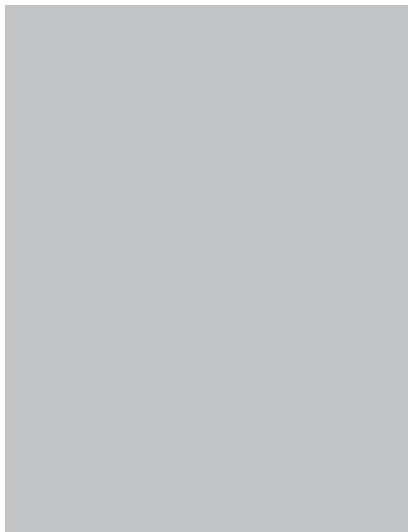
日本軍は、ハワイの米海軍基地を急襲して致命的な大鉄槌をくだしたという大本営陸海軍部のニュースが繰り返されました。フィリピンやホンコンそして南洋諸島も一気に制海権を掌中にして戦果は上々というのですから、国民は興奮に舞い上がりました。

翌1942(昭和17)年6月26日の「朝日新聞」には、「就職夏の陣 学生希望 南へ行く 繰り上げ卒業に大東亜景気」という見出しが躍っていました。「東京外語」では、250人の卒業生に求人800人、まさに3倍以上の好景気だとうたいあげていました。元東北大教授樋口陽一さんは、当時市内連坊小学校の生徒で、一人一個のゴムまりをもらって狂喜したと書いています。

昭和17年8月から半年経ち、ガダルカナル島の日米決戦(仙台の第二師団その他の兵士3万1,400人のうち2万800人が戦死)以来、日に日に劣勢に回ることになる。開戦の際の一抹の疑念も、大本営の欺まんの“戦果”と戦時体制強化によって維持することは困難になっていくばかりでした。

日本の政治は、軍部の同意なしに内閣組織は不可能となり、昭和16年10月東条英機大將が総理大臣になって、軍部独裁政治が頂点に達しました。

この時局の中学生は、「青少年学徒」という名において戦争完遂のためのエネルギー源となるべく指導が徹底されていきました。しかし国民は、強力なアメリカの

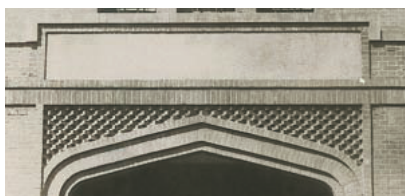


『河北新報』から

工業力・軍事力の前に日増しに立ちこめる暗雲を察知していました。生活の疲労も勤労意欲も困ばいが見え始めました。街角には戦意を煽るポスターが目立ちます。「贅沢は敵だ」は翌日には、「贅沢は素敵だ」に、「足らぬ足らぬは工

夫が足らぬ」が「足らぬ足らぬは夫が足らぬ」と塗り替えられてありました。市民のユーモア感覚でせめてもの反骨気分を広げなかったのですが、微力なものでした。

国民のうっ積した感情を反映するような事件がわが中学部でおこりました。昭和17(1942)年9月9日付けの『河北新報』に、「目障りな米英標語 問題になった東北学院の玄関」と題する一文が載りました。「東北学院100年史」によると、「3Lの“LIFE LIGHT LOVE”という米英標語が中堅学徒を育てる学園の玄関に堂々とのさばっている。一昨年ミッション・スクールの教育内容検討に米英思想の掃蕩を図った宮城県学務部では、調査に着手した。“三つのL”に就き同学院小泉部長と一問一答」という新聞取材に発展していったのです。当時の小泉要太郎中学部長(転校して来たご子息基君は私たちと同期)は、「“三つのL”は学校の信条か」の記者の質問に対し、「“三つのL”は御承知のやうに外国教育界の信条だ。前院長シュネーダー博士以来学院の精神の一つとして踏襲してゐる」(「100年史」から)という明解な返答は、この一問一答の核心で、当時の院長や校長がいかに苦渋の学校経営を強いられていたかが推察できます。学校当局は時代性を深刻に受けとめ、間もなく中学部正面玄関のLIFE LIGHT LOVEは姿を消したのです(下写真)。



消された3L

(2) 配属将校の特別室

校庭では軍事訓練や兵式体操に汗を流す毎日でした。楽しみの運動部も、野球部、蹴球部などは敵性スポーツの槍玉にあがり、活動は中止となりました。

1943(昭和18)年から、中等学校は5年が4年に、高等学校は3年から2年と短縮になりました。しかも生徒・学生たちは、同年7月6日「学徒戦時動員体制確立要綱



1943(昭和18)年4月1日付全職員

実施二関スル件」という通達を受け、在学のまま続々勤労働員に、同年10月21日には、法文系学生は徴兵猶予制度の廃止によって、「学徒兵」として学徒出陣に赴く同級生を送ることになったのです。

この年の4月1日、高等学部商科を高等商学部と、東北学院中学部を同中学校と改称され、院長出村悌三郎先生が中学校長を兼任し、津田郁先生が副校長となりました。玄関前での写真はその折の写真(写真上)です。私たちが持っている唯一の卒業記念となりました。児玉省三先生や着任して二年目の松山国夫先生、その他懐かしい先生方の顔が見えます。軍刀を持った配属将校や教官たち、敗戦になってどんな生活が彼らを待ちうけていたのだろうか。



1944(昭和19)年4月 卒業記念(児玉省三学級)

配属将校の配属令はすでに、1925(大正14)年4月13日に公布されて、中等学校以上の学校では現役将校による軍事教練が必須でした。「100年史」によると、東北学院はこの年5月から正式の教科として教練を採択していました。それ以来、専門部・中学部にそれぞれの配属将校が、一般教員室はもちろん、院長、部長室の外に特別に定められ、学校を国家主義的に思想統制する上で絶大な働きをすることになったのです。

昭和14年か15年か、つまり私たちが中学校入学して間もない頃、稚気とはいえ大胆なことを仕出かした級友が二人おりました。K君とI君です。院長室や配属将校の特別室の前を通ることさえ禁止同然というのに、この二人は特別室の前に立った。「いつの間にかそこに立っていたんだ。半開きのドアからおずおずと覗くと、見事な姿見があって、白布のテーブルにはサーベルと

軍帽その上に白手袋があったんだ」二人は畏敬を越えて陶然と吸い込まれたように“侵入”したのです。I君は手袋に手を通し、軍帽をかぶって鏡の前に立って拳手の敬礼をした。だが軍帽がずりおちてあたりが見えない。背後に将校が立っているのに気付いたのはK君に背中をたたかれたときだった。将校はこの少年の大胆さに呆気にとられ何一つ言葉を発しなかったらしい。一目散に室を出たこの二人はその後どうなったのか、罰を受けたのか、組担任が代わり大目玉を頂戴したのか。二人からは結末は聞かずじまいになりました。この二人は7年前に相次いで他界してしまいました。稚気まことに愛すべき級友でした。

中学部配属将校はその当時県立工業と兼務で、階級は陸軍少佐か中佐か、八谷弘という現役将校でした。軍人にしては居丈高なところがない人柄でした。雨天の時の授業は教室で、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」をひたすら暗唱できるように転写することでした。講話は「コミンテルン」(世界各国の共産党組織)とは何か、という難解な話でした。

1940(昭和15)年10月21日、私たちが二年生のとき、「紀元2600年記念軍事合同特別観兵式」が全校参加で宮城野原練兵場(現在は宮城県営総合運動場)で行われました。宮城野の空は晴朗でした。特設の指揮壇に院長か部長が立って、その前をクラスごとに行進するのです。第二師団からはおそらく査察の高官も同席していたはずです。行進が終り、整列して、配属将校自らいくつもの質問を発するのです。こんな大勢の中から私が指名されることはまずあるまい、この広野で拡声機も使わずどんな大声で答えても届くはずはあるまいと高をくくっていたのです。ところが天網は疎にして漏らさず、「二年二組大場」という八谷教官の声が耳に届いたのです。質問は「青少年学徒二賜ハリタル勅語の一節をのべよ」だったと思うのです。いまも覚えていないのです。返事はしたのですが、体は硬直し声が出ないのです。当然次の人に指名は移ったと思います。返答せずとは何事か、見方によっては反軍行為と早とちりされかねない。その一件はその後、私のトラウマとなって在学中精神的に負い目となりました。しかし、教官や先生からも、級友だれからも糾弾を受けることはありませんでした。数日後、一人の先生だけ、柔道の高平先生の授業の乱取りの時に、「大場こっちへ来い」と呼ばれて、先生と組むことを命じられたのです。「大場、なんで答えなかったんだ」とのとっさの質問に、「あの…」と口ごもった一瞬、見事に背負い投げを食らったのです。制裁はこの背負い投げ一本だけですみました。

国内では次第に軍部に反抗していく学生の言動が台頭していました。「東北学院100年史」の中に、「配属将校質問事件」や、旧制一高での内村鑑三の「不敬罪問題」に端を発して、仙台でも旧制二高生と東北学院生が、大劇場「宮城座」で激論を交わしかねない雰囲気があったことを詳述してあります。

軍部と学校、生徒との衝突は国家主義への傾斜の現象としておこっていました。旧制仙台一中(現仙台一高)でも横暴な配属将校に対する抵抗が、1943(昭和18)年、ある三年生によって試みられた事件がありました(「仙台一中・一高100年史」)。これは、「一中の自由の

ために」という論文が痛烈な配属将校弾劾に連なるものでした。当の将校はもちろん大憤慨したが外部に漏れることを恐れて、事件はそのまま葬り去られ、この将校は間もなく他に転属させられたという、「この事件は、当時の軍国主義の嵐の中において、本校生の一人が勇敢にも本校の伝統を守るべく立ち上がったものとして注目されなければならない」と記録されています。

旧制二高では、校長と将校が一對一で激論する事件がありました。「仙台市史」に色川大吉氏が書いています。「二高生は軍人には概して反抗的だった。軍事訓練や宮城野原での野外演習は極力サボった生徒たちがいれば、一番丁で酒に酔った軍人と喧嘩し、かれを殴ったとかで師団の将校が激怒し、二高の校長宅に押しかけ、『犯人を出せ』と抜刀しておどした。阿刀田令造校長は大人物だから、『生徒は出せぬ、斬るならまず私を斬れ』とって相手の毒気を抜き、追い返した」というのです。

Ⅲ. 外国人教師の帰国と「学徒動員」

1942(昭和17)年6月25日、アンケニー、シュネーダー、ゾーグ、R.ゲルハート先生たちが横浜出帆の交換船でアメリカに帰った後東北学院は大きな柱を失っていました。

翌年に、東北学院の歴史で最も屈辱となる「廃校命令」を受けることになっていたのです。「東北学院時報」に、萱場資郎私史「東北学院航空工業専門学校設立」と題して、昭和18年、日本の敗戦の兆しが顕著になった10月18日、出村悌三郎院長が非常に青ざめたお顔で上京され、東北軍管区司令官から、「東北学院は時局柄不要不急の教育機関である。よって今年限り廃校を命じ、校舎は軍に接収す」との命令を受けて苦慮しているとの相談を受けたくんだり書かれてあります。萱場氏の奔走で「東北学院航空工業専門学校」に改められ、私たちの同級生も一転して工学の道へ進む第一期生となったのです。

学校は相次いで文部省通達におびえる事態に追いこめられていきます。「学徒戦時動員体制確立要綱実施二関スル件」は、在学のまま軍需工場や農村へも生産拡張のために動員するというものでした。そればかりか、10月21日には、神宮外苑では、雨の中のいわゆる「学徒出陣式」が始まりました。理工系や教育関係を除く法文系は、兵役法施行規則改正により兵役に編入されたのです。修業年限4年となった中学校からは、軍学校や予科練生を志願して学校を離れる同級生も増えてきました。

軍部はこれでも満足せず、昭和19年1月18日には「緊急学徒勤労働員要綱」を出し、1年の3分の1、つまり4ヶ月を働かせることにしたのです。「勤労」といい「動員」といい、純粋に労働力不足の補充というより、戦争の緊張感を維持させるための教育の名の教育だったのでなかったのかとしか思えません。

1944(昭和19)年2月には「決戦非常時措置要綱」が出されました。中等学校以上の学徒はすべて一年間常時、勤労その他の非常任務に出動できる組織的体制に置かれることになり、理科系の者はそれぞれの専門に応じて軍需工場、病院などに動員、学校校舎は軍需工場あるいは軍用非常倉庫に転用することになり、旧二高校

舎正面二階が師団司令部に、東北学院高等部の一部が被服廠や海軍人事部に、中学校は出征部隊編成所に接収、礼拝堂地下室は特設非常電話局に、市内のその他の学校も“学校工場”に転用されたのです。

仙台市内の学校の生徒が軍需産業方面へ動員された主な例を各学校史から収集した実態は、「仙台市史」に詳しく載っています。これは戦時中の教育を知るには貴重な資料です。私たちは、すでに5年生の途中で、この動員令によって、船岡海軍火薬廠や原町陸軍造兵廠、多賀城海軍工廠などで労働に従事していました。船岡では雑木林の開拓の仕事でしたが、隣接した作業現場には、いつも看守に看視された一見して強制労働に服している青い制服姿が、一様に無言で、昼食時に切り株に尻をつけて、私たちと全く同じ瀬戸引きの黒ずんだ弁当箱の芋飯をうまそうに食べていました。それは私たちも同様で、朝昼夜かわらぬ芋飯でも、最高のご馳走でした。制服組の一人が友人に、「この戦争は負けるよ」と擦れ違わざまに言ったというその一言どうりになるとは…。

動員はますます拡大していきました。休みになって学校に帰ってきても、授業はなく、いつも自習でした。上級学校進学直前に頼りになるのは参考書だけでした。受験科目は大きく変わり、旧制高校、海軍の諸学校、商船学校や文科系の一部を除いて、英語は受験科目から除外されました。他のクラスの情報もなく、暗たんとしていた教室で、茨城の日立に動員されていた友人が、米軍の艦砲射撃で命を絶たれたという知らせを聞いたのもその頃でした。悲惨なニュースは他にもあったはずです。

IV. 「東北学院といえば英語」

—志を貫いた教育課程

中学部が中学校と改称され、出村悌三郎院長が中学校長を兼任となった1943(昭和18)年4月1日に学制が改革されました。5年制が4年制となり、外国語は、1、2年で必修、3年以上は選択、毎週4時間となりました。しかし学院中では、カリキュラム上では週5、6時間は設定され、学力低下を防いで3年以上でも必修で通したと記憶しています。旧仙台一中でも3年以上は必修科目にした(「仙台一中・一高100年史」)とあります。それぞれの学校で、19年、20年と戦局の推移につれて、政令も強まり、カリキュラムはしきりに変更を余儀なくされたのです。特に4年生以上の生徒には、動員を緩和してできるだけ学習指導が行えるように努力したものと思われれます。それは下級生の授業にも少なからぬ影響を与えました。

「東北学院といえば英語、英語といえば東北学院」といわれるようになった伝統はいつ頃からなのか。わが国の英語教育史を調べていて、新渡戸稲造が、1923(大正12)年に英文で書いた「わが国の英学」のなかに、「東北学院」と明記してあるのを発見しました。

これは、“The Use and Study of Foreign Languages in Japan”と題し、「新渡戸稲造全集(15巻)」に収められて、1929(昭和4)年に東京日日新聞から英文版で出版されました。慶応義塾の英学をはじめ、早稲田大学、

新島襄の同志社、東京外語、正則英語学校、暁星、聖心、上智、津田女子英学塾などの英学について触れているものです。明治初期の諸学校、とくに大学の英語教育の状況と、その以前の一貫している基盤の重要性を物語っていて大いに興味がわいてきます。

「東北学院の英語」といわれる二つ目の根拠は、多数の英語教員を輩出したことです。私が高校教師をしていた少々古い話ですが、1986(昭和61)年に調べた東北学院出身者は、小・中・高の教員数は1,377人、宮城県のほか東北各県に広がって、この教員数の中に占める英語教員の数が多いのは伝統といってよいでしょう。その後もこの伝統は守られていると信じています。

東北古代史研究家で元東北大学教授の高橋富雄先生は、昭和9年旧黒沢尻中学校に入学して、「英語では浦川清美という先生がいて、この人は確か東北学院の出身で、発音をきっちり指導する人だった。僕は英語が専門ではないが、今でも発音は正確な方です」と東北学院出身の英語の先生から教わった思い出を語っています(「河北新報」平成11年10月14日)。

「東北学院の英語」は、永い苦節の中から、アメリカの母教会から派遣された英語教師によって基礎ができました。1922(大正11)年、ハロルド・E・パーマーがロンドン大学教授から、文部省語学教育顧問として迎えられ、翌年英語教育研究所長となり、「パーマーの教授法」といってよい「オーラル・メソッド」という教授法を普及させました。

ポール・L・ゲルハードは、パーマーを積極的に支援協力し、研究所でも重要な位置を占めて参与しました。ゲルハード先生は学院の教室にオーラル・メソッドを導入しました。パーマーの理想が、ゲルハード先生や山浦拓造先生の教授理念として、特に中学部の入門期には、英語と動作を組み合わせた日本語を使わない授業として厳しい反復練習の洗礼を受けました。英語の勉強とはそういうものだと思い込んでいました。英語は生きた言葉でした。

「通じる英語」は、やがて海軍の諸学校や上級学校への進学に通じる英語に変わっていく運命にありました。外国人の先生らは交換船でアメリカに帰りました。強制帰国命令です。監視の目を盗んでこっそりと会いに行った山浦先生の手を握りしめたゲルハード先生は、「お前、しっかり勉強しろよ」と、シェクスピア全集を手渡したという話を、先生の言葉として読みました。

私にとって、「東北学院の英語」の魂は、山浦先生の英語にあったと思っています。

アメリカの思想家エマソンは、“青年には遠い地平線を与えなければいけない”と書いてあります。「東二番丁」は、私にはまがいもない“遠い地平線”でありました。

〈あとがき〉

「東二番丁物語」は平成14年11月7日の「三L会」で同じ題で講演したものです。また、東北学院英語史年報第21号の「戦時下の中学校英語の回想」の一部と重複していますことをお断りいたします。

プロフィール OBA, Tokiya

1926(大正15)年生まれ
東北学院中学校卒業
東北大学文学部英文科卒業
フルブライト奨学生として、
米・ミシガン大学留学
宮城県仙台西高等学校校長
東北学院大学専任講師

小松武治先生と『沙翁物語集』



東北学院大学名誉教授
久保 忠夫

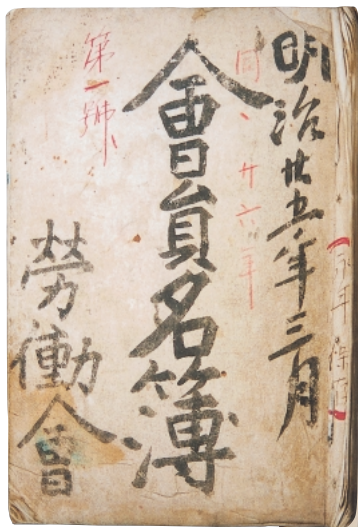
小松武治先生は東北学院普通部を明治30年3月に卒業、同年9月第二高等学校に入学、同33年7月に卒業、同年9月東京帝国大学文学部に入部、英文学を専攻、同37年7月に卒業した。これが小松先生の学歴であるが、小松先生の学歴を思うとき、よき師友に恵まれたと感嘆せずにはいられない。

東北学院においては、5年生のとき、9月から3月までの半年間ではあるが、島崎藤村に作文を学んだ。藤村に大正8年1月の「開拓者」に発表した「三人の訪問者」という作品があるが（これは単なるわたしの推測にすぎないのであるが）小松先生の仲立によるものではないかと思う。二高では国文学を佐々醒雪に学んだ。先生の最初の翻訳書『大みそか』には醒雪の序がある。『大みそか』はドイツのヨハン・ハインリッヒ・ダニエル・チョッカー（Zschokke, Johann Heinrich Daniel, 1771-1848）の*Das Abenteuer der Neujahresnacht*（大晦日の冒険）の翻訳。この喜劇小説を明治36年12月24日の日付で金港堂から小松月陵の名で出した（小松先生は明治30年1月11日に松下を小松と改める改姓届を学校に出している）。それに短いものではあるが醒雪が序を書いている。二高では第一部文科であったが、同じクラスに小山東助、齋藤信策、三浦吉兵衛、皆川正禮があり、第一部法科には吉野作造があり、二高の豊年の観がある。このうち高山樗牛の弟の齋藤野の人（信策）とは特に親しかった。大学は4年かけて卒業した。理由はわからないが、4年在学した。ちょうど英文科では、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が辞めて、明治36年の4月からは夏目金之助と上田敏とが講師として任に就いた。小松先生は3年生であった。小松先生はハーンと夏目・上田の双方の講義を聴いたわけである。

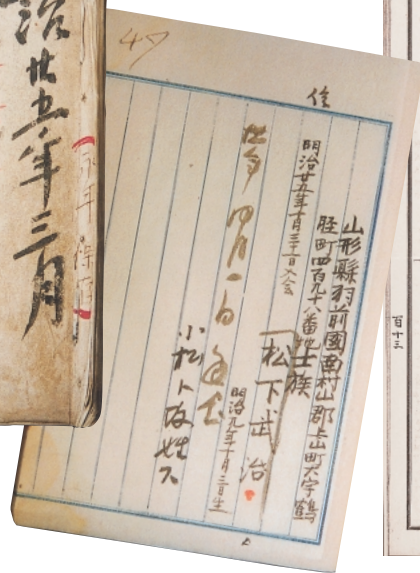
学歴を先にしるしたが、先生は1876（明治9）年10月3日に山形県南村山郡上山町大字鶴脛町498番地で生れた。父は上山藩士松下氏。

東北学院に学んだ理由について、「川中勘之助君の面影」（「東北学院時報」第189号、昭36・5・5）で「君は志摩鳥羽藩士の二男、私は羽前上山藩の三男坊でお互い貧乏士族の二三男」「当時の貧乏士族の二三男坊などは、青雲の志はあっても学資がなく、さりとて一生を田舎に埋れるのも本意にあらず、立志郷関を出る機会にあこがれたものであった」と書いている。どんな機会があった郷関を出たのかは判然としないが、働きながら学べる、ということであったにちがいない。先生の東北学院入学は「学籍簿」第1号によると、明治25年12月22日である。そして、労働会入会は「川中勘之助君の面影」に「私が君と親交を結んだそもその端緒は、明治26年9月東二番丁、労働会の幼年部が設けられた時にはじまる」とあるように、明治26年9月のことと考えるべきものである。たとえ、明治25年3月起の労働会会員名簿に明治25年10月31日入会とあるにしても（同名簿が退会を明治30年4月1日としているのは正しい）。労働会では、川中勘之助と「普通部（今の中学）卒業までの4年半ばかりは学校で机をならべ、労働会の塾舎では寝食をともにした莫逆の間柄であった」という。

小松先生は働きつつ学んだ、「勤学」ということに誇りを持っていた。徳富蘆花の『寄生木』は明治42年12月8日に警醒社書店から刊行された。この小説が出



1892 (明治25) 年3月起の
労働会会員名簿



学籍簿第1号

ると、先生は小松月陵の署名で「開拓者」(5巻1号、明43・1)に「小説『寄生木』を読む」を寄せ、結びの文章の中に「終りに彼が仙台に将さに来て志望して入会せんとせし当年の東北学院労働会には予も勤学しつつあった、彼若し来らば共に机を列べたのであらう、併し其時は寄生木の著者として存在しまい」と労働会で働きつつ学んだことを誇りをもって公にしている。

労働会と小松先生を考えると、落してはならないことがある。それは山川丙三郎、山中勘之助と三人で回覧雑誌「松籟」を発行し、「芙蓉峰」のさきがけをなしたことである。(「川中勘之助君の面影」参照)

小松先生はCharles Lamb (1775-1834) の *The Tales from Shakespeare* (1807) から次の十篇を選んで、翻訳し、明治37年6月12日に日高有隣堂から出版した。間もなく(7月)新学士になるという時である。内容は、

《悲劇》

- リア王物語
- オセロ物語
- ロメオ・ジュリエット恋物語
- マクベス物語
- ハムレット物語

《喜劇》

- 御意の俣物語
- 十二夜物語
- 暴風雨物語
- 威尼斯商人物語
- 冬物語

翻訳は逐語訳。「ロメオ・ジュリエット恋物語」の冒頭は「昔以太利の国ヴェロナ市に、キャピウレットと

モンタギューとの二豪族がありけり」(The two chief families in Jerona were the rich Capulets and the Montagues.) という調子である。「暴風雨物語」の冒頭は「曾て或る離れ小島が沖中にぼつちり一つありまして、プロスペロと云ふ老人と、ミランダと云ふ大層綺麗な小娘と此二人の外には、何処を探しても人の影さへ見る事が出来ませんでした」(THERE was a certain island in the sea, the only inhabitants of which were an old man, whose name was Prospero, and his daughter Miranda, a very beautiful young lady) という訳である。読んですぐわかるように、前者は文語であり、後者は口語である。訳者は「自序」でいう。「篇中悲劇に普通文体を用ゐ、喜劇に言文一致体を用ゐたるは、ラム既に両者の間に著しき^{けじめ}差異を置きたるをもて、其真似せんとてのさかしら^{わざ}業なり」と。巻末には「篇中戯曲解題」、「重要性格一般」、「チャールス、ラム小伝」(附メリー、ラム)、「シェクスピア小伝」をつけ、頭注にはデートン、ロルフ、パンチャード等のそれに学んで注解をほどこしている。

巻頭には、自序、原序があり、続いて講師アーサー・ロイド (Arthur Lloyd, 1852-1911) による英文の Charles Lamb を置き、次に上田敏の「沙翁物語集序」、漱石(そう署名してある)の「小羊物語に題す十句」の講師二人の序が来る。

いかに英文科出身の新学士になる人とはいえ、出版社にとってはそんな無名の者の翻訳書は出せないという気持であつたろうと思う。そこで折衝の結果、英文科関係の三人の先生方の校閲と序文を得られたならばという条件を課したのであらう。小松先生の「本屋の強請に応じ」ということばがその間の事情を語っているように思える。

漱石の「小羊物語に題す十句」は異色である。漱石

全集の俳句の部に収められているが、それとすぐにわかる。俳句の部に英文が出て来るからである。たとえば、

四

Lady, by yonder blessed moon I swear, That tips with
silver all these fruit-tree tops-

Romeo and Juliet Act. II. Sc. II.

というように、シェクスピアの原作から二行から四行の詩句を抜いて来て、詞書というか、交響のためのことばとか、それを置き、

罪もうれし二人にかかる朧月

と句を出すのである。シェクスピアの原詩でこの箇所は福田恆存が、ロミオの言葉として、

ジュリエット様、僕は誓言します、見渡すかぎり、
樹々の梢を白銀色に染めているあの美しい月の光
にかけて。

と訳しているところで、これを前句に見立てて附けた句ではあるまい。全篇を意識し、ここに焦点をしばった句とでもいうべきか。漢詩の一行を前においたものは蕪村などにもある。『蕪翁句集』に、

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかぜや散さくら

「風入馬蹄輕」は杜甫の詩句「風入四蹄輕」の記憶違いだが、それにしても、詩句と句はつきすぎている位である。それに比して漱石の場合はずっと離れている。しかし、このようなところにヒントをえたということは十分に考えられる。英文学者だからシェクスピアの詩句で試みてみよう。

漱石の十句の順序は1がリヤ王、2がテンペスト、3がハムレット、5がマクベス、6が十二夜、7がオセロ、8がベニスの商人、9が冬物語、10がお気に召すまま、である。

こうした序文が功を奏したか、この訳書は世の讀書子の迎えるところとなった。明治37年6月12日初版、8月15日再版、10月10日三版、12月6日四版、明治38年5月25日五版（以下未詳）。初陣（実質的な）でこれだけの間にこれだけ版を重ねたというのは数少ないことと思われる。

ちなみに、ラムの『沙翁物語』20話のうち、ここに選ばなかった10話―「夏の夜の夢」、「しっぺい返し」、「終よき皆よし」、「から騒ぎ」、「婢婦馴らし」、「ヴェロナの二紳士」、「間違ひの喜劇」、「タイモン」、「ペリクリーズ」、「シムベリン」―を訳して『沙翁物語十種』と題して明治40年12月に博文館から小松月陵の名で刊行した。大正3年6月に北文館から『沙翁史劇物語』を出しているが、その序文のはじめに「覚えて居る人が

あるか何うかは知らぬが、私は曩日ラムの沙翁物語を二冊に分けて訳した事がある」と書いている。その「二冊」というのは、『沙翁物語集』と『沙翁物語十種』のことである。『沙翁史劇物語』は、「云ふまでもなくラムには悲劇と喜劇とのみで史劇と名づくべきものがない」というところから、史劇の梗概を書いた種本をと心がけていたところ、キルコーチ (Quill-Couch, Sir Arthur Thomas 1863-1944) の *Historical tales from Shakespeare* に遭遇してこれを訳すことにしたという。ただ、この書には、「コリオレーナス」、「ジュリアス・シーザー」、「ジョン王」、「リチャード二世」、「ヘンリー四世」、「ヘンリー五世」、「ヘンリー六世」、「リチャード三世」があって、「アントニーとクレオパトラ」、「ヘンリー八世」が欠けているので、「註釈相手に原本を読んで見たり、沙翁が種本に使った『沙翁のブルターク』とか、ハズリットやダウデンや他の書物を参照する事となり、勝手に取捨を施し大体を捉へるを主眼として」この概要をつくり、「ここに史劇十篇即ち全部を綴り出すの運びに至った」（以上、序文）という。ただ、「沙翁劇の残りの五、六篇、之れは何うしたら良からうか」の恨みが残った。これは大正3年6月の詠嘆であるが、その後先生がどうされたか、つまびらかにしない。

私が東北学院大学に奉職するようになったのは1956（昭和31）年の4月のことである。東北学院にゆくことになったとき私の思ったことは、『若菜集』時代の藤村について調べてみようということであった。ちょうどそのころ『東北学院70年史』が花輪庄三郎先生の手によって編さんされていた。花輪先生と話す機会も多かったが、あるとき、藤村の教鞭をとったころの教え子に小松武治という先生が健在で、よく古いことも覚えているからあなたも近づきになるとよいという話があった。その時のことで印象深かったのは、小松さん、東大を出るとき、片手に卒業証書、片手にラムの『沙翁物語集』を持ってさっそうと校門を出たと話されたことである。しかし、手紙を書いたのは昭和32年の8月5日、勤めてから一年以上経っていた。長い手紙であったし、卒業論文の口述試問のように質問を並べたものであったから、小松先生、さぞ迷惑をなされたろうと、いま当時の小松先生の齢に近づいて、切にそう思うのである。先生からはついに返事をいただくことが出来なかったが、翌昭和33年の年賀状の返しに、裏表一杯に先生の興味のあるところとか、よく覚えているところとか、に関して答えて下さった。それから亡くなられるまで頻繁にはがきの往復があった。それはたとえば、図書館にある古いブリタニカの百科事典のことを書いて平凡社の百科事典におよぶ文章を書き、その文章の載った学院大新聞を送ると、いま一日早く着くと木村久一君に見せられたのに残念です、といったふうのものであった。木村さんは小松先生と同じコースで大学を出て、早大の教授になったが、筆禍をかってやめ、平凡社に入って百科事典を手がけたという



角帽になった年の専門科教職員及び同窓生で、下から2列目右から5人目が、小松武治氏。

ことで、「事典」（ことてん）は木村さんの創出という。いま一つ、木村久一といえ、あの『早教育と天才』の著者の、と思われる人もまだまだあろうかと思う。この本は広く読まれた。今も読まれ続けている。はじめ、大正7年に心理学研究会出版部から近世心理学文庫の第一巻として出たが、大正10年には改訂増補版が大鏡閣から出て版を重ねた。戦後、昭和52年、玉川学園出版部が重版した。さて、そのころ東北学院を出て東大を卒業した人達が何人か、日を決めて神田一ツ橋の学士会館に集り、昼食をともにしながら古きよき時代を語るのだ、といつか小松先生から教えられた。

小松先生は東京オリンピックの年、昭和39年の10月24日に亡くなられた。88歳であった。他の著訳書や職歴などは略したが、見事な一生であったと思う。

はじめのはがき（年賀状）の中で最も重要と思われるのは、次の一節である。

夏目、上田両先輩の間柄は外見上判明しませんが、御推察の点も幾らかはあったように思われます。学生としての私は本屋の強請に応じて当時の三講師に校閲序文を乞うた迄でした。私の序文中に夏目、上田両先生にそれぞれ五つの校閲を乞うたと特記したのは夏目先生の注意に困ったものでした。両者の性格にかなりの相違があったことはあの小訳書によっても伺われます。

ここはわたしが手紙に、

とくにあの沙翁物語の訳は注目いたしてをります。この間も新版の漱石全集の書簡が配本になって来たり、俳句の部をみるにつけ、先生と漱石の御関係に

ついてお伺いしたいなどと考へたことです。また、沙翁物語には上田敏の序文もあるので、実のところ頭をかしげてもゐるのです。漱石と敏とは仲が悪かったといはれてゐます。お二人とも先生の先生ですが、ほかに両先生から序文をもらってゐる著訳書があるかどうか、よほどの特例であつたのではないか、その辺の事情などもおききたいと思ふのです。

と書いたことに対する返答である。小松先生の葉書の中に「私の序文中に夏目、上田両先生にそれぞれ五つの校閲を乞うたと特記したのは夏目先生の注意に困ったものでした」とあるのは特に有難い。「私の序文中に」とあるのは「自序」の

附言す。此書を成すに当りては我が文科大学なる三講師先生の厚意を蒙りたる事一方ならず。即ち夏目先生にはリア王、オセロ、ロメオ、ジュリエット、御意の俣、冬物語。上田先生にはマクベス、ハムレット、十二夜、暴風雨、威尼斯商人の労を賜はり、

というところを指す（この後に、アーサー・ロイドは疑問点をただすのに応ずるといふかたちでかわったことを書いている）。これをもって、漱石はただ責任のおよぶところを明らかにしておくよう注意したまでだといつてしまえないこともない。「自序」には「厚意を蒙り」とか、「労を賜はり」とかあるだけで、その内容はわからない。それを葉書で「校閲」と書いて下さった。そこで漱石全集の書簡集を読み直す。小松武治宛は三件あるが、沙翁物語に関係あるのは二件である。一つは明治37年3月27日付けのもの。

拝啓 先日御持参のリヤ王物語拝見一々原文と対照候為め存外手間どり候今分にては他の分も相応に時日を要すべきかと存候乍失敬少々添削を施し申候へば御披見の上御取捨可被下候 以上

これでわかる。漱石は「一々原文と対照」し、「少々添削を施す」ほど厳密にみているのである。ここには、いやしくも事をゆるがせにしない態度がある。取捨をという敬虔さがある。つづく書簡は四月〔日不明〕、校閲を終えて、原稿を女中に持たせてやった時のもの。

御依頼の冬物語閣下御急ぎの事と存候間召使を以て御送り申候御落掌可被下候

是にて沙翁物語も一先結了一寸一服出来る訳に候以上

見終ってほっとしている。忙しいであろうに、教え子のために真剣に取り組んでいる。そして、「御急ぎの事と存候間」という心づかいもしている。

これに比して上田敏はどうか。序にしても、小松武治訳にかかわるところは「こたび小松氏が書中の名篇十種を選び、其翻訳を公にするに当り、此わが愛読書の讚美を以て序に代ふ」という終りの部分のみ。それも、この愛読書を讚美をするきっかけとなったといっているだけで、小松訳に触れるところはどこにもない。（「名篇」十種を選び」というところが、訳者の選択眼を讚美したということか）これでは原稿に目を通したかどうかさえ疑わしい。小松先生の「両者の性格にかなりの相違があったことはあの小訳書によっても伺われます」と言い切っているのからも察せられる。

漱石は敏を軽んじていた。不仲だといったのは適切ではなかったかも知れない。それよりなぜ私が不仲だといったかの方が大切であろう。『吾輩は猫である』を読んだ人は誰も漱石が敏を好きではなかったと思うに違いない。「六」（『ホトトギス』明38・10）で、迷亭に「たったそれ丈で俳劇はすさまじいね。上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云ふものは消極的で亡国の音ださうだが、敏君丈あってうまい事を云ったよ。そんな詰らない物をやって見給へ。夫こそ上田君から笑はれる許りだ。云々」といわせている。上田敏が「亡国の音」をいったことはない。いったのは與謝野鐵幹である。それに内容も違えてある。小説の中に実名を出し、しかも、何のかかわりもないことと結びつけている。それのみではない。少し先には東風の newer 詩集の原稿のことが出て来て、それには献辞があり、「世の人に似ずあえかに見え給ふ／富子嬢に捧ぐ」というのだという。この「あえかに」は前の叙述から敏に結びつく。「明星」派一般ではありえない。そして、「あえかに」の字義をあげつらって、東風が「蚊弱いとかたよわくと云ふ字だと思ひます」というのに対して迷亭に「さう取れん事はないが本来の字義を云ふと危う氣にと云ふ事だぜ」といわせている。英文科の4年後輩の、この間まで同僚であった人に対する対し方と

しては尋常とはいえない。数え立てることもないが、一つだけでは、そこを書くとき虫のいどころが悪かったということにもなりかねないからいま一例あげる。

漱石は明治40年11月24日に小宮豊隆に宛てて依頼状を書いているが、その冒頭は「明日上田敏氏送別会にて午後四時頃迄に上野精養軒へ参り候」である。その送別会の折のこととして、登張竹風は「上田柳村、因に夏目漱石のこと」（『人間修業』所収）に、次のようにしている。

柳村の西洋留学送別会が、上野の精養軒で催された。デザートにはいって、乾杯をする段になった。主賓の右が夏目漱石、左が森鷗外であるから、両先生のどちらかにやってもらいたい。そこで幹事の與謝野鐵幹が、代る代る両先生に哀願するが、両先生ともどういう訳かどうしても承知しない。そこでいかなる風の吹き廻しか口説上手と見られたものか、與謝野君が僕に、夏目を説き伏せてくれと言う。ぐずぐずしては、一座が白けるだけであるから、柄にもなく立ち上って、漱石の横まで行って、「万歳を唱へてくれたまへ、」という漱石先生、きよんとした顔附をして、言う返事が面憎い。「万歳といふものは、君どう唱へるんだ。」「どうもかうもないさ、上田君万歳の一語でよからう」と、こちらも白ばくられて応じると、「さうか、それだけならやらう。」とやっと承知をしてもらって引き下がった。すると漱石やおら立ち上った、中々一語どころではない。曰く、「別に西洋へ往ったからって、倫敦塔が動き出す訳ではないから、西洋へ往くのは無駄なことだ。西洋の風俗が見たいのなら、写真や活動写真で沢山だ。尤も、上田君は金があるさうだから、そこんところは貧弱な私とは大いに違ふところはあるにはあるが……その上田君のために乾杯をして、登張君が唱へると云ふから、万歳を唱へます。」と皮肉な前口上を置いて、一段声を低うして、全く蚊の鳴くような声で、「上田君万歳！」。

このよって来るところが、小松武治訳『沙翁物語集』校閲の姿勢にも出ていると私は考えるのである。それだけでなく、五つの分担を明らかにするよう漱石が注意したというのは、そのことを承知して、上田などと一緒にされては迷惑だと思ったからと理解するのである。

そこで思うのは、岩波書店刊の漱石全集の「注解」のことである。昭和32年6月27日発行の新書版漱石全集第27巻（書簡集 一）では「小松武治」を項目に立て、「チャールス・ラム著『沙翁物語集』の訳者。（中略）漱石はその中の数篇の校閲をしてやり、（下略）」と説明している。そして、1996（平成8）年3月19日発行の漱石全集第22巻（書簡 上）の「注解」でも、「御持参のリヤ王物語拝見…」の項の下に「小松武治によるチャールス・ラム著『沙翁物語集』訳出に際し漱石はその中の数篇の校閲をし、（下略）」となっている。40年何



第3回ホームカミングデー正門



受付風景



受付を済ませて



田口誠一 学院長・同窓会会長のごあいさつ

“懐かしい出会いがそこにある”

第3回 ホームカミングデー

『同窓祭』

平成14年10月19日(土)



同窓生代表ごあいさつ
川嶋民男氏（昭和37年卒業生）
株式会社雄松堂代表取締役社長



記念礼拝
説教者：佐々木哲夫宗教部長
『神の言葉で生きる』



記念礼拝



記念式典



特別講演会
講演者：鈴木征夫氏（昭和39年卒業生）
宮城商事株式会社取締役社長
演題：『地域経済と東北学院大学同窓生の役割』



2002年度学生懸賞論文表彰
倉松学長から賞状と副賞が授与された



2002年度学生懸賞論文入賞者 優秀賞：我妻美香(経2)さん右側
佳作：田中梓(法3)さん中央/佳作：高橋宏和(経2)君左側



倉松学長のあいさつ

同窓生スピーチ



石川茂男氏(昭和47年卒業生)



新井力氏(昭和57年卒業生)

ホームカミングデー〈同窓祭〉は、東北学院大学を卒業された20年目、30年目、40年目、50年目の方々をお迎えして、同窓生相互の親睦と現役学生や教職員との交流を通して親交の輪を広げ、また同窓生と本学との絆を深める願いから土樋キャンパスで行われました。会場のあちこちに懐かしい顔、かお、顔。再会の輪が広がり、参加した一人ひとりが、今日の母校キャンパスに感動し、同時に開催された大学祭も懐かしみ、胸一杯に青春にタイムスリップして楽しんだようです。



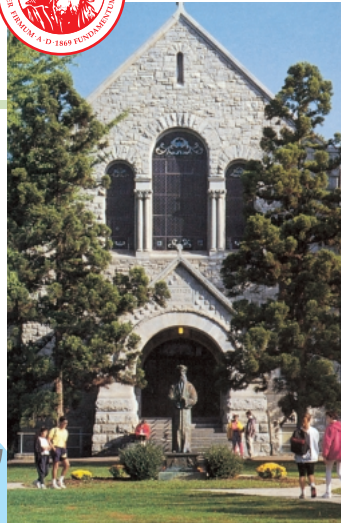
モーションジャズオーケストラによる演奏



交歓の輪が広がる昼食会場



アーサイナス大学夏期留学の歴史



第30回記念 特別展

平成14年5月15日(水)～10月4日(金)

本学と米国アーサイナス大学との交流は、1973(昭和48)年以來から2002(平成14)年で30周年を迎えた。これまで本学から同大学の夏期留学には総勢780人もの学生が参加するなど、お互いに夏期留学や交換留学などで交流を深めてきた。

同大学は、1869(明治2)年に創立された教養学部系の4年生私立大学で、米国ペンシルヴァニア州カレッジヴィルにある。



“Bomberger Memorial Hall”前にあるウルジーヌス像。ドイツの神学者で『ハイデルベルグ信仰問答』の執筆で知られる。

夏期留学の歴史

東北学院資料室 特別企画展

(アメリカ合衆国ペンシルベニア州)

アーサイナス大学と
東北学院大学

5月14日(火)～10月4日(金)

祝祭日はお休み 見学無料

開室時間 10:30～16:30

昼休み時間(12:30～13:30)

なお、長期休暇中については別にお知らせいたします

東北学院資料室



前列左からジョン・ストラスパーガー学長、倉松功学長、トルディー・ストラスパーガー夫人。後列左から小田三千子国際交流センター所長、関根正行副学長、関谷登国際交流委員長



創立116周年記念式典



アーサイナス大学長へ名誉博士学位授与



北山墓地の
校祖墓前礼拝

説教：酒井薫 牧師(日本基督教団仙台北三番丁教会)『主にお仕えした先達』



アーサイナス大学との国際教育交流&夏期留学 International education exchange agreements of Ursinus College

Time	Year	Tohoku Gakuin University				Ursinus College		
		Exchange professors	Exchange students	American studies		Exchange professors	Exchange students	Japanese studies
				学生数 (付添数)	年・期間 (日数)			
1	1973			13 (2)	昭和48.7. 1 ~ 8.28 (59日間)			
2	1974			10 (2)	昭和49.7. 1 ~ 8.27 (58日間)			
3	1975			15 (2)	昭和50.6.30 ~ 8.24 (56日間)			
4	1976			16 (2)	昭和51.6.28 ~ 8.28 (62日間)			
5	1977			13 (2)	昭和52.8. 2 ~ 9.24 (54日間)			
6	1978			23 (2)	昭和53.7.29 ~ 9.24 (58日間)			
7	1979			36 (3)	昭和54.7.29 ~ 9.22 (56日間)			
8	1980			31 (3)	昭和55.7.30 ~ 9.25 (58日間)			
9	1981			36 (3)	昭和56.7.26 ~ 9.18 (55日間)			
Sub total (1973 to 1981)		0	0	193 (21)		0	0	0 (0)
10	1982			40 (3)	昭和57.7.27 ~ 9.13 (49日間)			9 (2)
11	1983			37 (3)	昭和58.7.26 ~ 9.13 (50日間)			3 (1)
12	1984			22 (3)	昭和59.7.27 ~ 9.13 (49日間)			0 (0)
13	1985	1		39 (3)	昭和60.7.30 ~ 9.17 (50日間)			7 (2)
14	1986			40 (3)	昭和61.7.28 ~ 9. 6 (41日間)			10 (1)
15	1987			39 (3)	昭和62.7.27 ~ 9. 9 (45日間)	2		7 (1)
16	1988	1		40 (3)	昭和63.7.28 ~ 9. 9 (44日間)			9 (1)
17	1989	1		40 (3)	平成 1.7.27 ~ 9. 9 (45日間)	1		6 (1)
18	1990			39 (3)	平成 2.7.28 ~ 9. 8 (43日間)			7 (1)
19	1991		3	34 (3)	平成 3.7.28 ~ 9. 7 (42日間)		6	11 (1)
20	1992	1	2	29 (3)	平成 4.7.27 ~ 9.10 (46日間)	1	5	10 (1)
21	1993		3	14 (2)	平成 5.7.26 ~ 9. 9 (46日間)		2	4 (1)
22	1994	1	3	19 (2)	平成 6.7.25 ~ 9. 9 (47日間)		4	7 (1)
23	1995		3	17 (2)	平成 7.7.25 ~ 9. 7 (45日間)	1	1	2 (1)
24	1996		3	14 (2)	平成 8.8. 1 ~ 9.12 (43日間)		1	4 (0)
25	1997	1	3	18 (2)	平成 9.7.29 ~ 9.12 (46日間)		3	2 (0)
26	1998		3	18 (2)	平成10.7.28 ~ 9.10 (45日間)		0	1 (0)
27	1999		3	23 (2)	平成11.7.28 ~ 9. 7 (42日間)	1	0	0 (0)
28	2000	1	3	27 (2)	平成12.7.29 ~ 8.29 (32日間)		0	4 (1)
29	2001		3	24 (2)	平成13.7.26 ~ 8.28 (34日間)		0	3 (1)
30	2002		1	11 (2)	平成14.8. 1 ~ 9. 3 (34日間)	1	1	1 (0)
Sub total (1982 to 2002)		7	33	584 (53)		7	23	107 (17)
Sum totals (1973 to 2002)		7	33	777 (74)		7	23	107 (17)

特別企画展『アーサイナス大学と東北学院大学』



アーサイナス大学夏期留学の写真パネル



ストラッスパーガー学長夫妻、企画展に来訪



25年の熱き戦い

第25回対青山学院大学二部交流定期戦

2002年8月3日(土) 於:泉キャンパス

二部交流定期戦25周年を迎え、熱戦が繰り広げられた対青山学院大学。記念大会となった今年には、『友情』の記念プレート設置・記念誌の発刊・祝賀会などが行われ、両校のさらなる「信頼」と「友情」を確かめ合った。



記念プレート除幕式 出村彰 東北学院大学副学長



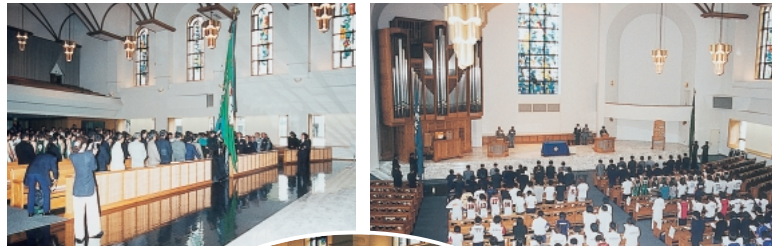
両大学代表者による除幕の瞬間



『友情』の記念プレート



『友情』を前に握手を交わす



校旗入場

開会礼拝



選手宣誓
鈴木陽一 卓球部部长
東北学院大学経済学部
経済学科(夜間主)3年



柴田良孝
東北学院大学学生部長



林伸二
青山学院大学
第二部担当学長補佐



関根正行
東北学院大学副学長



武藤元昭
青山学院大学学生部長





鏡割りを行う両大学関係者



乾杯 沼田哲 青山学院大学元学生部長



祝賀会
会場



中央：沼田俊則 東北学院大学前学生部長



定期戦戦績一覧

回数	年	優勝校	回数	年	優勝校
1	1976年(昭和51年)	記録なし	13	1990年(平成2年)	東北学院大学
2	1977年(昭和52年)	この間、4回実施されているが、戦績の記録なし。ただし、1982年(5回大会)までの通算戦績は、青山学院大学の3勝に対して、東北学院大学は2勝。	14	1991年(平成3年)	東北学院大学
	1978年(昭和53年)		15	1992年(平成4年)	青山学院大学
	1979年(昭和54年)		16	1993年(平成5年)	東北学院大学
	1980年(昭和55年)		17	1994年(平成6年)	青山学院大学
	1981年(昭和56年)		18	1995年(平成7年)	青山学院大学
5	1982年(昭和57年)	19	1996年(平成8年)	青山学院大学	
6	1983年(昭和58年)	東北学院大学	20	1997年(平成9年)	青山学院大学
7	1984年(昭和59年)	青山学院大学	21	1998年(平成10年)	青山学院大学
8	1985年(昭和60年)	東北学院大学	22	1999年(平成11年)	青山学院大学
9	1986年(昭和61年)	青山学院大学	23	2000年(平成12年)	青山学院大学
10	1987年(昭和62年)	青山学院大学	24	2001年(平成13年)	青山学院大学
11	1988年(昭和63年)	青山学院大学	25	2002年(平成14年)	青山学院大学
12	1989年(平成元年)	東北学院大学			



大学祭

大学祭・高校文化祭・幼稚園行事

昇華祭(工学部祭) 10月12日(土)～13日(日)

今年の昇華祭(工学部祭)は『connect!! ～人へ、世界へ～』をテーマに掲げ開催。近隣の住民が多く訪れ、にぎわいを見せた。



泉キャンパス祭 10月13日(日)～14日(月)

秋晴れに恵まれた泉キャンパス祭は、いたる所で多彩な催しが行われ、早朝より大勢の人が訪れて、大いに盛り上がった。



六軒丁祭 10月18日(金)～20日(日)

『濃縮還元』をメインテーマに大学祭の成功を目標として学生たちの気持ちをまとめ、参加者へ還元する六軒丁祭として開催された。



学院祭 8月31日(土)～9月1日(日)

今年で43回目を迎えた学院祭は『いいことしよう』をテーマに、生徒たちの日頃の活動成果の発表や趣向をこらした催しが繰り広げられた。



榴祭 9月6日(金)～7日(土)

第34回榴祭は『榴かよ! 祭りかよ!! 熱いビートでのるのかよ!!! ~太陽浴びて燃える榴っ子~』をテーマに掲げ開催された。



幼稚園行事

わくわくどきどきでスタートした園生活、さまざまな行事を通して園児たちは幼稚園の楽しさ

面白さを大発見!!



●入園式
4月11日(木)



●運動会
9月29日(日)



●クリスマス
12月17日(火)



●造形展
11月8日(木)～10日(日)



島崎藤村没後60年記念

『島崎藤村と東北学院』特別展

◆開催期間：10月15日(火)～20日(日)

- 特別展示「島崎藤村と東北学院」於：土樋キャンパス 8号館
- 常設展示「東北学院の歴史&島崎藤村」於：礼拝堂地階資料室

島崎藤村が1943(昭和18)年に71歳で亡くなってから60年ということで、全国統一の記念事業が企画され本学も参加した。

藤村は仙台神学校(現東北学院)に1896(明治29)年9月～1897(明治30)年6月まで作文と英語の教師として在職していた。この一年足らずの東北学院時代に藤村はさまざまな文豪、著名人との交流を深め、その間の詩作は後の詩集「若菜集」となった。

期間中は、本学が所蔵する藤村にかかわる資料などの特別展示「島崎藤村と東北学院」の他、図版目録『島崎藤村と東北学院』(本学教養学部教授渥美孝子編)の発行、常設展示「東北学院の歴史」や

『ガラ藤村』による舞台公演のビデオ上映、久保忠夫本学名誉教授による「島崎藤村と東北学院」と題した記念講演、さとう宗幸氏による「片恋」コンサートなどが実施された。

東北学院時報

東北学院時報 第608号 2002(平成14)年9月15日発行

島崎藤村没後60年記念・統一企画事業参加 特別企画「島崎藤村と東北学院」 —東北学院所蔵の島崎藤村関係資料を公開—

今年には文豪島崎藤村の没後60年に当たり、これを記念する全国統一事業参加特別企画が、藤村ゆかりの各地方・各機関で相次いで実施されております。仙台では、仙台近代文学館において4月から6月にかけて特別展示が行われ、8月16日には県民会館において「ガラ藤村」一巡による藤村の青春時代を取り上げた「乱れて熱き我が身には」が公演され好評を博しました。

藤村と仙台の関わりは、明治29年、藤村が我が東北学院の英語・作文の教師として赴任したのに始まります。当時、藤村は生活の面でも、文学の面でも多くの問題と苦悩を抱え、心身共に疲弊した苦悩に満ちた時期であったといわれています。藤村は新しい天地を求めて東北学院に赴任し、仙台の豊かな自然、暖かい人情、布施談を始めとする同僚知人との交友、学生との交情といった新しい環境の中で、次第にその傷ついた心を癒す一方、東北学院のケルカー記念図書館の多くの洋書を読みふけて、進むべき新しい文学の途を探り、ついに自らの進むべき方向として新体詩の途を確立することになります。仙台時代の多くの詩作は「若菜集」に結実し、明治30年、藤村はこの「若菜集」を携え、東北学院を辞して帰京し、中央文壇に華々しく再デビューして、後に文豪と称せられる途を歩むこととなります。藤村の一年足らずの東北学院時代は藤村にとりまして、我が東北学院にとりまして、また仙台地方にとりまして、まことに意義深い大きな期間であったと考えております。藤村赴任当時の東北学院は、近代西政社会に直結する仙台における門戸として、まさに興隆期の活気に満ちた学院であり、藤村からも大きな刺激をうけ、また藤村も当時の東北学院の生活から多くの得るものがあったと思われます。

東北学院では、既に藤村没後30年を記念して、当時の教職員有志が関係資料の調査をほぼ終了してはおりますが、当時の世相からこれを公開することはできませんでした。

今年の「藤村没後六十年記念全国統一事業」は東北学院が所蔵する藤村関係の資料を再整理し公開する良い機会であると考え、この統一事業に参加し、下記要領にて特別企画「島崎藤村と東北学院」を開催することといたしました。

ご家族やご友人・知人とお誘いあわせの上でおいでいただきたく、ご案内申し上げます。

会期	10月15日(火)～10月20日(日) 10:30～16:00 ※20日(日)のみ12:00～16:00
会場	東北学院大学土樋キャンパス (仙台市青葉区土樋一丁目3-1)
展示	特別展示 『島崎藤村と東北学院』8号館3階
	常設展示 『東北学院の歴史』 東北学院資料室(礼拝堂地階) 『ガラ藤村』による舞台公演ビデオ鑑賞 8号館4階
イベント	押川記念ホール 8号館5階
	10月19日(土) 13:00～ 講演「島崎藤村と東北学院」本学名誉教授 久保忠夫氏
	15:00～ 「片恋」コンサート さとう宗幸氏
	10月20日(日) 13:00～ 「藤村第六・第七詩集」コンサート 上田郁代、堀形幹太、中村フシ他

連絡先 / 特別企画「島崎藤村と東北学院」実施委員会事務局
TEL.022-264-6465 FAX.022-264-6458



藤村展告知のポスターとチラシ

特別企画「島崎藤村と東北学院」

貴重資料の展示や公開講座を開催

文豪島崎藤村の没後六十年記念全国統一事業参加特別企画が、藤村ゆかりの全国各地で実施されるのに併せ、本学では十月十日から二十日まで、特別企画「島崎藤村と東北学院」を開催した。公開期間中は、東北学院が所蔵する島崎藤村にかかわる資料などの特別展示「島崎藤村と東北学院」写真・上の他、常設展示「東北学院の歴史や乃乃藤村による舞台公演のビデオ上映が終日一般に公開された。また、十九日には久保忠夫本学名誉教授による島崎藤村と東北学院と題した記念講演

は今回が初めてのもも多く、来場者は往時に思いを馳せつつ、真剣な眼差しで展示に入っていた。期間中の来場者数は約六百人。藤村と本学のかかわりは、明治二十九年、藤村が東北学院の作文・英語の教師として赴任したのに始まり、一年足らずの東北学院時代に藤村はさまざまな文豪、著名人との意義深い時間を過ごし、その間の多くの詩作は詩集「若葉集」に反映されている。なお、東北学院資料室では来年五月まで、特別展示「島崎藤村と東北学院」の一部を常設展示している。お問い合わせは東北学院資料室 ☎022-264-16423（法人本部広報室）まで

東北学院時報 第610号 2002(平成14)年11月15日発行



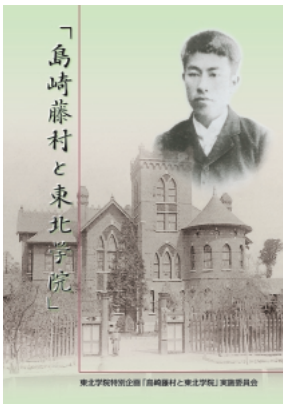
展示会場入口



展示会場風景



ビデオ室



図版目録「島崎藤村と東北学院」(渥美孝子編)



本学名誉教授
久保忠夫先生の記念講演
演題「島崎藤村と東北学院」



資料室見学風景

東北学院資料室では『東北学院の歴史&島崎藤村』と題し、常設される三校関連の資料に加え、島崎藤村在仙当時の資料やかかわりの深い人物を写真パネルを中心に展示。特別企画展と合わせて、多くの見学者が訪れた。



ケルカー図書館

1891(明治24)年南町通りに「仙台神学校」が出来た時、その一室を書籍室にし数百部の和漢洋書と内外の雑誌数部を備えた。その頃、米国リフォームド伝道局の会計だったR.F.ケルカーは当時の良書約1,500冊を供給した。このことからケルカー記念図書館と称された。当時においてはまれにみる図書館で、岩野泡鳴や島崎藤村らも利用した。



R.F.ケルカー

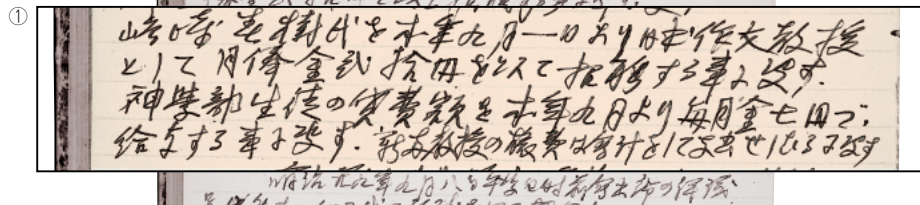
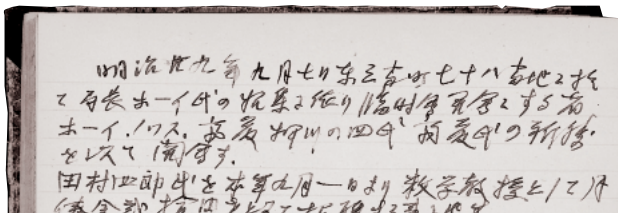


資料室の藤村に関する展示品

理事会記録 Board Directors Proceedings

東北学院理事会記録は、学校経営と教育の基本を決める議事録で、ここには職員の名前を決める記録があるが、島崎藤村に関わる記録は2件ある。

- ①『島崎春樹氏を本年九月一日より日本文学教授として月俸金貳拾円を以て招聘する事に決す…新両教授の旅費は会計をして支出せしむるに決す』
【1896(明治29)年9月7日】



東北学院大学 工学部創設40周年記念 式典・講演会

2002(平成14)年11月15日(金)・仙台国際ホテル

東北学院大学工学部は東北学院創立75周年記念事業の一環として昭和37年4月に、機械工学科・電気工学科・応用物理学科の三学科が開設され、その後、大学院工学研究科の設置や土木工学科の増設などの発展を続けながら、平成14年に創設40周年を迎えた。

平成14年4月には機械創成工学科・電気情報工学科・物理情報工学科・環境土木工学科へと学科名の改称を果たし、新たに鹿又武教授を工学部長に迎え、次代を担う新たなスタートを切っている。



多賀城キャンパス正門



多賀城キャンパス礼拝堂



多賀城キャンパス二号館内部



礼拝堂前のハンカチの木
撮影：工学部事務長
故清水道生氏
(没：平成14年10月64歳)



鹿又武 新工学部長



- ① 受付風景
- ② 倉松功学長あいさつ
- ③ 佐藤利三郎元工学部長の祝辞
- ④ 鹿又武工学部長あいさつ
- ⑤ 記念講演：ペガルタ仙台育成会部部長の鈴木武和氏『子どものヤル気を引き出す』
- ⑥ ⑦ 祝賀会懇親の様子
- ⑧ モッシージャズ・オーケストラによる演奏



1969(昭和44)年頃の多賀城キャンパス



現在の多賀城キャンパス



1963(昭和38)年頃の化学実験室



1963(昭和38)年頃の物理実験室 旧礼拝堂



1970(昭和45)年頃の機械実習



1970(昭和45)年頃の電気実験

2002(平成14)年時事

東北学院に関する時事		東北学院に関する時事				
1月	11日	AO入試B日程合格発表	5月	20日	日本研究夏季講座開講式（～6月7日）	
	17日	高校推薦入試		23日	大学体育会結団式	
	18日	榴ヶ岡高校 卒業礼拝		30日	大学文化団連合会入会式	
	22日	榴ヶ岡高校推薦入試	6月	1日	第53回対青山学院大学総合定期戦（～3日）	
	29日	中学入試		7日	日本研究夏季講座修了式・送別会／中学・高校 平成14年度奨学会総会開催	
	30日	中学入試合格発表／交換留学生選考試験		14日	第48回対北海学園大学総合定期戦（～17日） アーサイナス大学夏期留学第2回学外研修（～16日）	
	31日	体育会表彰式（相澤優子さんに特別功績賞）		27日	大学院入学試験特別選考	
2月	1日	高校入試／大学一般入試前期日程（～4日）	7月	4日	平成15年度東北学院大学入試・進学指導者懇談会 大学院入学試験特別選考合格発表	
	4日	榴ヶ岡高校入試		6日	泉キャンパス礼拝堂にて平成14年度後援会総会開催	
	5日	高校入試合格発表	8月	1日	全国高校総合体育大会にて榴ヶ岡高校 浦川彬君 が110メートル障害で全国2位（～6日） アーサイナス大学夏期留学出発（～9月3日）／第 28回サマー・カレッジ（～3日）	
	8日	榴ヶ岡高校入試合格発表		2日	大学『オープンキャンパス』	
	10日	大学一般入試前期日程 外国人留学生特別入試合格発表		3日	第25回対青山学院大学二部交流定期戦（記念大会）	
	26日	大学院入試（前期日程）		10日	第20回対北海学園大学二部総合定期戦	
	27日	大学院入試（後期日程）		29日	大学第48回教職員修養会（～30日）	
3月	1日	高校卒業式／榴ヶ岡高校卒業式	9月	25日	大学院入試	
	5日	課外活動功労者表彰授与式／オリエンテーション・ リーダー功労者感謝状贈呈式		30日	東北学院理事 松山国夫氏逝去	
	6日	夜間主コース社会人特別入試B日程／再入学・転 学部・転学科・編入学（一般B・社会人）試験	10月	3日	大学院入試合格発表	
	7日	大学一般入試後期日程／大学院入試合格発表		12日	工学部「昇華祭」開催（～13日）	
	8日	体育会監督会発足10周年記念講演会・祝賀会挙 行／『体育会50年史』発刊		13日	泉キャンパス祭（～14日）	
	15日	大学一般入試後期日程合格発表／再入学・復学・ 研究生発表 夜間主コース社会人特別入試B日程合格発表／転 学部・転学科・編入学（一般B・社会人）試験合 格発表		15日	特別企画『島崎藤村と東北学院』（～20日）	
	16日	幼稚園卒園式		18日	六軒丁祭（～20日）	
25日	中学校卒業式／大学卒業式／博士学位授与	19日	第3回東北学院大学ホームカミングデー			
29日	退職者辞令交付式	31日	ライフル射撃全日本女子学生選手権 遊佐真奈美 さんが優勝（～11月3日）			
4月	1日	経営学科がインターンシップ正式導入 大学院経済学研究科 経営学専攻が開設 大学工学部四学科 学科名称変更正式認可 法学部長に中村英教授就任 工学部長に鹿又武教授就任 中学高等学校長に出原莊三副校長就任 中学高等学校副校長に松本芳哉教諭が就任 榴ヶ岡高等学校長に杉本勇副校長が就任 榴ヶ岡高等学校副校長に久能隆博教諭が就任 法人 役職者等辞令交付式、新任職員辞令交付式	11月	2日	全日本吹奏楽コンクール 大学SWEが二年連続銀賞	
	3日	大学入学式		15日	工学部創設40周年記念式挙	
	9日	中学・高校入学式／榴ヶ岡高校入学式	20日	推薦入試／AO入試A日程／夜間主コース社会人特 別入試		
	11日	幼稚園入園式	29日	推薦入試／AO入試A日程／夜間主コース社会人特 別入試合格発表		
	5月	14日	アーサイナス学長夫妻、企画展に来訪／東北学院 理事・前中学・高等学校長 武藤俊男氏逝去	12月	6日	泉キャンパス公開クリスマス
		15日	創立116周年記念式典を挙／アーサイナス大学 長へ名誉博士学位授与		11日	大学クリスマス礼拝（土樋・泉）
18日		榴ヶ岡高校 奨学会総会開催	12日		大学クリスマス礼拝（多賀城）	
			13日	第53回公開東北学院クリスマス礼拝		
			17日	幼稚園クリスマス		
			19日	AO入試B日程第2次選抜／TG推薦入試		
			20日	中学・高校クリスマス礼拝／榴ヶ岡高校クリスマ ス礼拝		
			24日	東北学院職員クリスマス		

東北学院資料室運営委員会規程

(設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

(目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に係る刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に係る情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

(運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

(運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
 - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
 - 三 中学・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
 - 四 法人本部長、法人本部次長、法人本部室長、広報室長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
- 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。
実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
- 4 運営委員会の事務は、広報室が行う。

(資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報がこれを行う。

(規程の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

附則

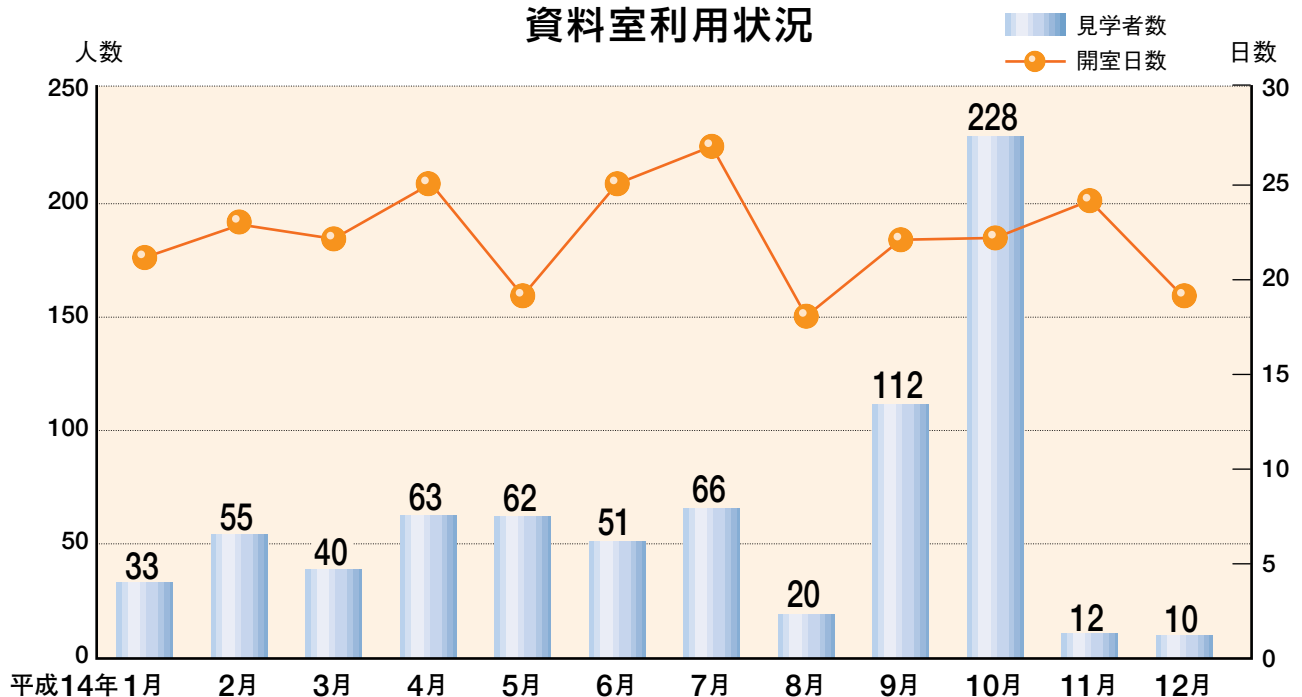
本規程は平成13(2001)年4月1日より施行する。

資料室日誌

2002(平成14)年

- 2月14日 東北学院高校・榴ヶ岡高校推薦入学誓約式参列者父母(24名)
- 4月 1日 新入教職員(14名)
- 4月 8日 英国イートンカレッジ関係者(2名・同伴3名)
- 5月14日 米国アーサイナス大学学長夫妻
アーサイナス大学夏期留学第30回記念 特別展示
『アーサイナス大学と東北学院大学』(5月15日～10月4日)
- 5月16日 文学部史学科青柳ゼミナール生(23名)
- 5月28日 同窓生(昭和19年中学部卒5名)
- 6月14日 北海学園大学関係者(15名)
- 7月11日 宮城学院大学学長
- 7月19日 舞台公演『青春の賦』出演者(15名)
- 7月25日 宮城学院関係者(3名)
- 9月 6日 二軒茶屋老人会(12名)
- 9月 7日 志田郡成人大学(55名)
- 9月13日 関西学院大学大学史編さん室関係者(2名)
- 9月26日 長町南小学校父母(10名)
- 10月19日 ホームcomingデー参加者(78名)
島崎藤村没後60年記念 特別展示
『東北学院の歴史&島崎藤村』<平成14年10月15日～平成15年5月2日>
- 10月22日 日本私立大学連盟研修員関係者(9名)
- 11月21日 モンゴル国研修員(3名)

資料室利用状況



東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	田口 誠一
委員	副学長	関根 正行
	宗教部長	佐々木哲夫
	総務部長	飯土井公洋
	総務部次長	高橋 征士
	中学・高等学校副校長	松本 芳哉
	中学・高等学校事務長	荒 孝夫
	榴ヶ岡高等学校副校長	久能 隆博
	榴ヶ岡高等学校事務長	高橋 正博
	幼稚園教頭	多田 征子
	法人本部長	佐治 勇
	法人本部次長	大童 敬郎
	広報室長	工藤 勝義



資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

授業期間中

月～金 10:30～16:00

但し、昼休み時間(12:30～13:30まで)を除きます。

土 10:30～12:00

(祝祭日はお休みいたします。)

長期休暇(春休み・夏休み・冬休み)中

月～金 10:00～15:30

但し、昼休み時間(12:30～13:30まで)を除きます。

(土・祝祭日はお休みいたします。)



広報室

広報室長	工藤 勝義
広報室長補佐	吉田 知致
	早坂 友行
	渡辺 洋樹
	平田 三枝

発行日 2002(平成14)年12月31日
編集 東北学院資料室運営委員会
発行 学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478
【URL】 <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>
印刷 東北堂印刷株式会社